

---

 卷 頭 言
 

---

## 表面科学講演大会をふりかえって

福 田 安 生



「日本でも表面科学会ができましたよ。」とアメリカで、日本から来た友人に聞いたのを、今でも覚えている。帰国後、第一回“表面科学討論会”(1982年2月19, 20日, 中央大学理工学部。当時は討論会であった)に出席したが、その当時はまだかなりこじんまりした討論会であった。この文章を書くために、過去の発表件数を調べてみたところ、第一回より、24, 22, 34, 35, 55, 68, 94件であった。ここ3年ぐらいで、急激に発表件数が増加している。それにともなって、今号のように投稿原著論文数も増加した。これは、講演大会委員長はじめ委員の方々の御努力にもよるが、会員各位の御協力のたまものであると感謝する次第です。

表面科学は、科学の最先端と深くかかわっていて、それが講演大会にも反映されている。例えば、STMや高温超伝導などの研究発表が何件か含まれている。今年は「常温核融合」(重水素のパラジウム、チタンへの吸着、吸収ということを考えると表面に関係する)についての発表があるかも知れない。

一方、表面科学は Science のみならず、Technology にも大きく貢献している。その意味からすると、まだまだ会社関係の人達からの発表が少ないように思える。我々の努力不足であろう。Science と Technology の“界面”をもっと広げることが、本会の使命であると肝に銘じている。

このような観点からすると、会誌名も“表面科学”でよいのだろうか、個人的には思っている。

(静岡大学電子工学研究所)